

Ai研 NewsLetter No.4

相澤病院臨床研修センターニュース

2010年11月1日

ノーベル賞ニュース初感

—Serendipity と ingredient—

日本人の二名の化学者が本年度ノーベル賞を受賞することが明らかになり、最近の暗い世相を明るくしました。とりわけ、お二人が受賞決定の知らせを受けた直後のインタビューでは、本人の気持ちがまとまらない中での実感が出ていて、2008年益川敏英教授の受賞時の率直な言葉を聞いたときの様に感動しました。北海道大学の鈴木章教授は日本語で、在米のパーデュー大学根岸英一教授は、当初英語で、そして日本向けには日本語で感想が語られました。聞いていて感じたことを2、3記します。

1. 鈴木教授はインタビューの中で無意識的にさらっと「セレンディピティ」(serendipity)という言葉を使いました。聞き逃した方が多かったのではないのでしょうか。すぐに日本語で説明しておられましたが、この serendipity の意味は、「何かを探して(研究して)いるとき、探しているものとは別の価値のあるものを見つける能力」ということです。日本語のことわざの「犬も歩けば棒にあたる」に近いのですが、当たった棒の価値を見抜く能力を養うことが大切なのだと理解しました。勿論歩かなければ棒にもあたりはしませんが・・・

まさに、ノーベル賞のアルフレッド・ノーベル博士がニトログリセリンの実験中、たまたまその配合薬をみつけてダイナマイトが開発できたこともその一例にあたるでしょう。

そういえば、私がこの夏、聖路加国際病院で行われた脳神経外科学会の“同時通訳フォーラム”に参加した際、同院理事長の日野原重明先生が、「セレンディピティは重要な言葉だ」と、語源的な説明を加えながら講演していました。また、最近読んだ若林正剛、E・ブラウン著「日本力」(PARCO 出版)の中にもセレンディピティが日本人の心にあるということが書かれています。「迎えに行く偶然」あるいは「偶然を自分に引き寄せる能力」としていますが、当然それには普段からの準備が必要です。

2. 在米の根岸英一教授は、日本からの電話インタビューの中で、科学研究には、熱意に加え「厳しさ」が ingredient であると言っておられました。一緒に聞いていた家内が、「私、その言葉知っている」というので辞書で確認したところ、私の知っていた「要素、成分」以外に「材料」の意味があり、何のことはない、料理をする際に使う言葉であったために、家内も知っ

ていたのかと納得した。

3. 根岸教授はまた、「若い人たちが、外国に旅行目的でなく学問目的でどんどん出てゆくことが大切」と述べていました。今後若い世代がノーベル賞を受賞するようになるために、大切なことの一つであり、私も同感です。勿論、必要条件としての ingredient ではありませんが。

それから、鈴木教授が述べていたように、外国での勉強の成果が認められ、あるいは培った人間関係の中から、ノーベル賞に推薦されることがあるかもしれません。例えば鈴木・根岸両教授がブラウン教授という素晴らしい指導者に出会ったように。

僭越ながら、私自身が外国で勉強した中から得た感想を述べさせてもらえば、外国留学中に同じ釜の飯を食った同世代の仲間との付き合いから得たものも大きい。苦楽を共にした彼等との共通の目標、そして何にもまして、得られた信頼関係が最大の宝です。やがて彼等の中には大成して国際社会で活躍する研究者・臨床家となり、遠く離れた日本で孤軍奮闘している友人を励ましてくれ、国際舞台で引き立ててくれることにも繋がる可能性があります。もう一つ追加させてもらえば、外国留学には連れ合いを連れて行くことです。生涯を通じて最大の理解者・協力者として貴方を支えてくれるようになるでしょう。

報道によると、近年日本から外国への留学生数の減少と、英文論文数の減少が見られます。相澤病院にも留学制度があります。外に目を向けることは、内なる自分を見つめ直すことでもあります。それは科学する心とより良い医療の実践に通じます。科学には国境はないのです！

臨床研修センター長
小林 茂昭